北越雪譜

初編 天

ル 4
328
1

東京稗四郎著
北越雪譜
三卷
東京人西村屋
版元

越後 鈴木牧之撰
江戸 京水百鶴画

京山人百樹 刪定

北越雪譜 初編 三巻

東京書肆 寛裕舎蔵

呂門弗巻 32P 1

北越雪譜敘

世之農商而嗜文雅者、或不知取捨文章之
雅徒企羨韻士墨客之風標沈酣文酒流連
月而置生計於不問以傾産業者間亦有之是
豈嗜文雅罪哉甚人特自取之耳矣鈴木牧之
翁者北越塩澤之老農也性嗜文章而能尚節
儉抑騁情不務誦讀於経営之中而務鉛槧於
會計之餘以交遠近之墨客嘗以堪忍之二字

銘自守以故其名久布遠邑而生業亦因以致豐饒矣嗚呼若翁者不徇文雅之名而能務其實者非耶余於翁得一面識於江戸而後特以書訂交者有年矣今茲乙未遠寄示雪著北越雪譜者六卷併囑以校訂時方盛夏火威如燬乃就小囱下試繙而閱之則越雪恍如耳目間驟眉之蹙目見紛霏之影使人頓忘輒中之苦讀到積疊埋屋行旅不通人以窮乏業米或不給則澹然寒顫肌膚而之栗生矣余因以謂孰袴輕薄子宗當微雪俄下紛紛舞空之際彫鞍寶勒飛玉蹄於郊坰或氈帽棕鞋蹈纏瑤於衢衢或亟舸載妓或高樓呼酒直以奢膳遊樂事曾不知飢寒而何物若令甚人淡世書依以想其稚稚凍餒之苦狀乎然則安亥不有能有怪非宴安之公共而戚戚焉生戒懼之心者哉寧梓而行之至有裨益世教蓋非鮮小也間者

猶得秋涼聊削繁雜校訂方畢者三卷書賈
文溪堂見而喜之謀梓行之余寄箇以告翁
曰雪中閉戸漫筆豈敢梓耶於是予不復俟請
之於翁拳拳然翁之嗜文雅而能務其實必
必笑領之而已翁之稿本國字之間雜字者嘗
不添音訓之假名余今盡添之以便童蒙云爾
天保六年乙未秋菊月朔日
江戸 京山人百樹并書

此書の稿本図ハ別冊とし或ハ其説と大図坏描て添るもあり
皆牧之翁ゞ自筆の草画也其拳梓行の為ゞ せゞ稿ハ図と
法帖重複ありて今梓に臨て其図の過半坏省き又坏新に
写かれを存して巻中に夾刺せるハ単冊に尽し難坏ゆえ也則ち
是刪定の意に係る所也余嘗て原図坏閲するに雪中の諸状
混錯を走墨に委して通暁し難きかれ靴中の瘡痒なる坏何如
元性翁ゞ草図に倣ひて喜ゞ描せる而已或原図の梓に入るもハ則
ち是坏如ふ或説有て図書きかの其説に據て其図坏作りもあり蓋余志
越地坏踏ず越雪の喜事に於て茫然たり故に雪図に於て違漏あり
知らべきまゝ其説を編者に駢るもと勿き　乙未秋　京山男少年　京水百鶴

掘除積雪之圖

枕間簸〻
雪華飛天
曙色来白
四囲綿絶
樵林人不見風濤猟径犬
空飢懶乗冷乾促寄履屐
掛衾光集敵衣屋裡要知
春色到墻頭立春早梅蕾

右賦小越雪景

江戸 醉石山人禄題

京水筆

屋上雪掘圖

縫を穿て雪行圖

雪中歩行の用具

京水図

北越雪譜初編 全上中下 卷之上目録

地氣雪と成る弁
雪の深浅
雪の用意
雪の堆量
雪を拂ふ
雪道
胎内潛
熊捕 並白熊
雪中の虫
雪中の火
雪頽
雪の形狀
雪意
初雪
雪竿
沫雪
雪蠶
雪中の洪水
熊人を助
雪吹
破目山

○通計 二十一條

北越雪譜初編卷之上

越後塩澤 鈴木牧之 編撰
江戸 京山人百樹 刪定

○地気雪と成る弁

凡天より形狀為して下す物○雨○雪○霰○霙○雹○露ハ地気の粒珠なる所霜ハ地気の凝結なる所冷気の強弱ふるて其形を異ふるのみ地気天ふ上騰形を為て雨○雪○霰○霙○雹となるでも温気をもちまバ水となる水ハ地の全體なるゆえの地ふ飯ゆり地中深けまバかるゝず温気あゝ地温ゆる式得て気式吐天ふ向て上騰ゆる人の気息のごとく昼夜片時も絶るゆゑ一天も又気式吐て地ふ下す是天地の呼吸なり人の呼と吸とのごとく天地呼吸して萬物を生育ス天地の呼吸常式失ふ時ハ暑寒時ふ應せゞ大風大雨其餘さまゝの天変あゝ天地の病ゆる天ふ九ツの段あり段ゝ九天と称ふ九段の内最地ふ近き所を太陰天と称ふ地式去ること高さ四十八万二千五百里と称ふ太陰天と地との間ふ三ツの際

あり天ハ近を熱際とのハ中を冷際とのハ地ハ近を温際とのハ地気ハ冷際を限りとして熱際ハ至つて冷温の二段ハ地を去ること甚だ遠くして冨士山ハ温際を越て冷際ふちなきもの也絶頂ハ温気通ぜざる由也艸木を生ぜず夏も寒く雷鳴暴雨を温際の下ハ雷と夕立ハをんさいの雲ハ地中の温気より生ずる物也ハ其起る形ハ湯気のごとし水沸て湯気の起と同じ雲温なる気ハ以て天ハ升りかの冷際ハ温なる気消て雨となる湯気の冷て露となるが如し　冷際ハ雲ハ雲散して雨ハ露なるべし

さて雨露の粒珠ハ天地の気中ハ在る様ハ以て艸木の實の囲ハ皮なるも気中ハ生ずる由なる雲冷際ハ凝て雨となるゝと雖ども時天寒甚しく時ハ雨氷の粒となりて降り下る天寒の強と弱とハよりて粒珠の大小ハ為す是を霰と雪とも雪ハ夏ハ其の弁地の寒強き時ハ地気形ハ成るべし天ハ升る微温湯気のごとし天の曇ハ是ハ地気上騰ること多けれバ天灰色をなして雪をなんとハ曇る雲冷際ハ到り先雨となる此時冷際の寒気雨ハ氷ハ充力たるる由花粉を為して

下ハ是雪と地寒のよるきとつよきとハよりて氷の厚と薄との如し天ハ温冷熱の三際あるハ人の肌ハ温ハ内ハ冷なる臓腑ハ熱なると同じ道理と気中萬物の生育悉く天地の気格ハ随ふ由なる是余が發明ハ非ず諸書ハ散見して古人の説と

○雪の形

凡物を視るハ眼力の限りあり其外を視ること能ハず人の肉眼を以雪ハ成べし一片の鵞毛のごとくなれども数十百片の雪花ハ併合て一片の鵞毛を為す是を驗微鏡ハ照して視るハ天造の細工なる雪の形状奇妙なる事下ハ図せるが如し其形の齊々たるハ冷際ハ於て雪となる時冷際の気運ひとしくなる由なる雪の形気ハ應じて同じくなる故ども肉眼のハ及ばざる至微物也昨日の雪も今日の雪も一望の白糢糊を為すこと下の図ハ天保三年　許鹿君の高撰雪花図説ハ在る所雪花五十五品の内ハ謄写ゆえ雪六出ハ為　御説ハ曰「凡物方體ハ四角なる必ハを以て一ハ圍と円體ハ丸を六ハ以て一ハ圍む定理中の定数誣べからず」云こ雪を六

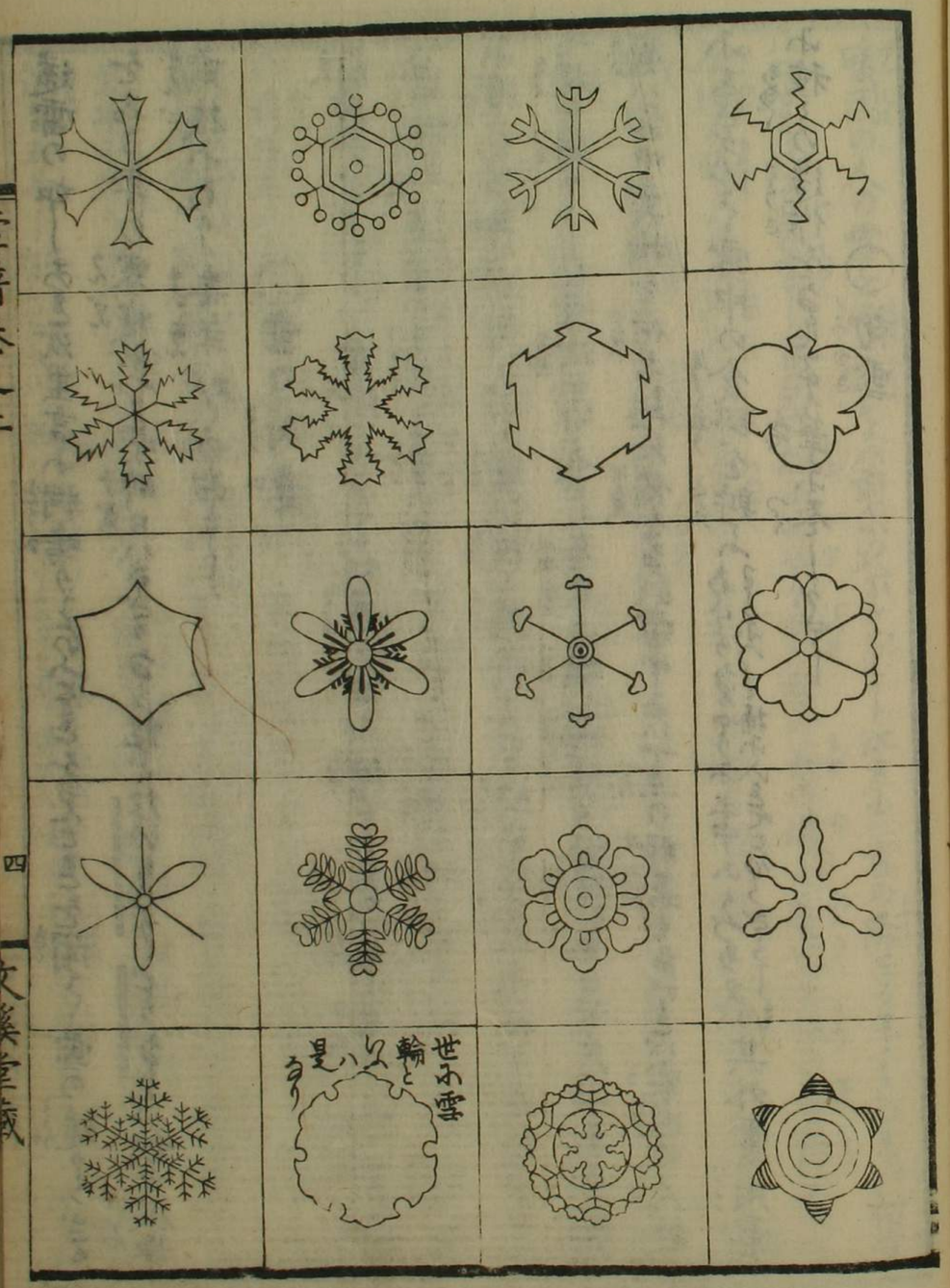
の花とのふるゆ　御説を以ておもべし　愚按ずるに円ハ天の正象方ハ地の実位ゝ天地の
気中に活動する万物悉く方円の形式ならぬその一式以いかに人の體方にして方
ならず円にして円ならず是天地方円の間に生育ゆゑに天地の象式なるゆゑなるゆゑ子
の親に似るに相同じ雪の六出する所以ハ物の負長数ハ陰半数ハ陽ゝ人の体男ハ
陽なるゆゑ九出し・頭・両耳・鼻・両手・両足・男根　女ハ十出す　男根なく　両乳あり　九ハ半の陽十ハ長の陰ゝ志ち
ゆゑ陰陽和合して人式為ゆゑ男に無用の両乳ありて女の陰にかくれり女に不用の
陰舌ありて男にかくれる気中に活動萬物比理に漏るゆゑ雪ハ活物にあらざれども
変ずる所に活動の気あるゆゑに六出しする形の陰中或陽に象る円形を具し
もあり水ハ極陰の物なれども一滴ゝ時ハ丸く円形をなす落るところに活く
崩るゆゑに陰にして陽の円をなすなり奇ゝ妙ゝ愚筆に尽しがたし

○雪の深浅

左傳に隱公八年平地尺に盈を大雪と為と見えるハ其国暖地なるゆゑ唐の韓愈が雪
を豊年の嘉瑞とのひしも暖国の論ゝなれども唐土にも寒国ハ八月雪降ゆ五雜
組に見えたり暖国の雪一尺以下なれば山川村里立地に銀世界をなす雪の飄ゝ翩ゝ
たるを観て花に諭へ玉に比べ勝望美景を愛し酒食音律の楽を添へ画に寫し
詞につゝ称翫するハ和漢古今の通例なれども是雪の浅き国の楽ゝ我越後
のごとく年毎に幾丈の雪を視て何の楽きゆゑん雪の為に力を尽し財を
費し千辛万苦するゆゑ下に説く所を視ておのゝ

○雪意

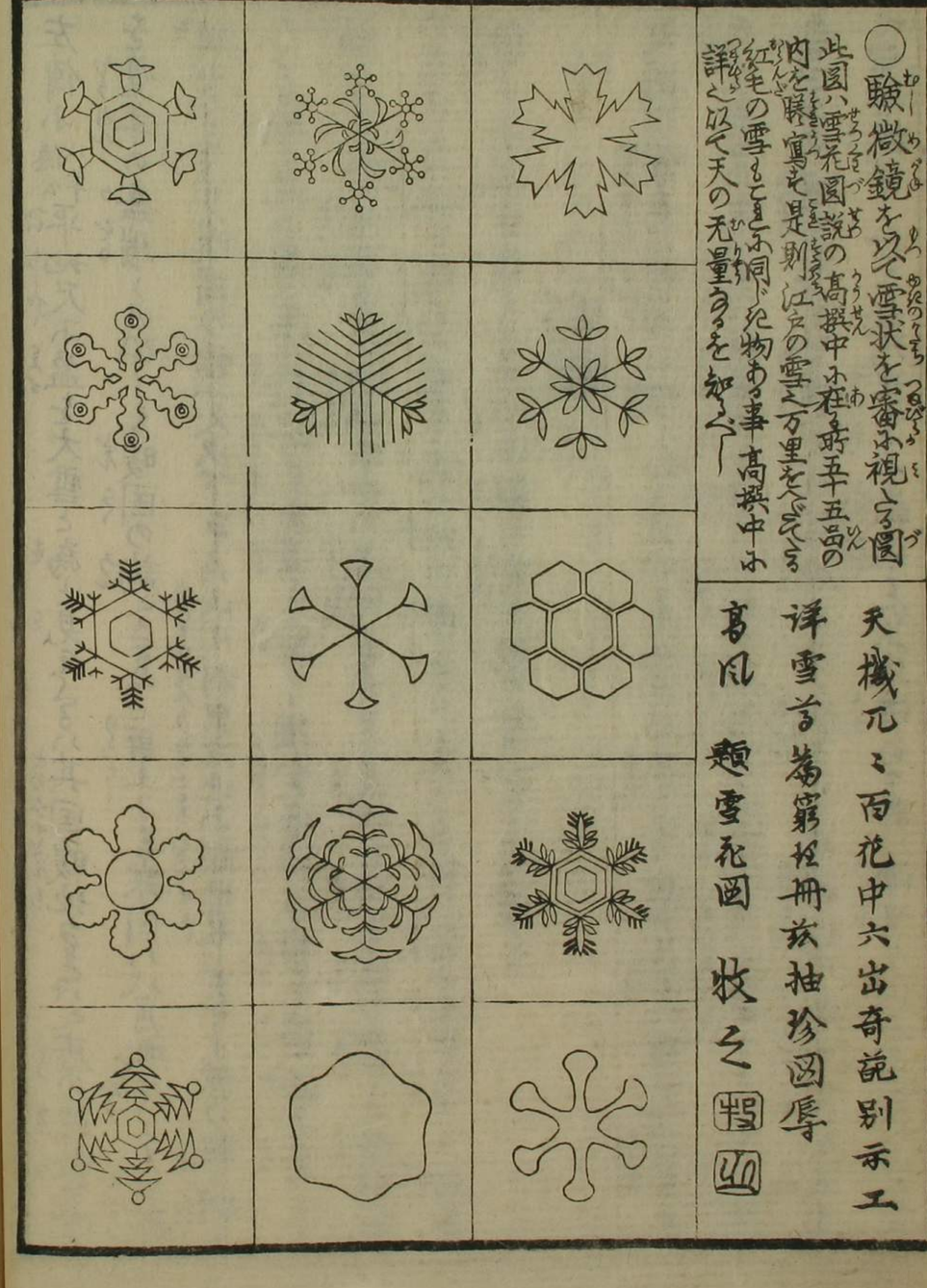
我国の雪意ハ暖国に均しかるゆゑ九月の半より霜を置て寒気次第に
烈しく九月の末に至ハ殺風肌を侵て冬枯の諸木葉を落し天色霽て日の光
看ざるゆゑ連日是雪の意ゝ天気朦朧たるゆゑ数日にして遠近の高山に白を点ず
て雪を観せしむ云ふ俗里言に嶽廻とのふ又海ある所ハ海鳴り山ある所ハ山ある



文機堂藏

○驗微鏡を以て雪状を審に視る圖

此圖ハ雪花圖説の高撰中に在る所五十五品の内を縁寫せ是則江戸の雪と万里をへだてる紅毛の雪もことに同じ物ある事高撰中に詳く以て天の无量なるを知べし



天機凡そ百花中六出奇葩別示工
詳雪譜篇窮極冊茲抽珍図辱
喜風 題雪花図 牧之 印

文機堂藏

遠雷の如くあるを俗里言に胴鳴りとのいふことを聞く雪の遠くうごくを雪の寒暖につるゝ時日はさゝらを振どたけまくりどうゐりは秋の彼岸を去る年の寒暖につるゝ時日はさゝらを振どたけまくりどうゐりは秋の彼岸前後にあり毎年かくのごとし

○雪の用意

前にいへるごとく雪降んとする兆量り雪に損ぜらるゝを為に屋上に修造を加へ梁柱廂家の前の屋翼を里言ふらりゝ廊架なり其外もゝべて居室に係る所力弱きを補ふ雪に潰まゝるを為に庭樹に大小に随ひ枝の曲べきに沢にまげて縛束揖丸太又は竹を添へ杖とす枝を強くせむ雪折をいとゝ冬草の類は菰筵を以覆ひ包む井戸は小屋を懸厠は雪中其物を荷ふもの兆備をなす雪中は一点の野菜もなければ家内の人数に応じて雪中の食料を貯ふ桶に入れ土中にうづめ又は其外雪の用意に種々の造作をなす筆に尽しがたし

○初雪

暖国の人の雪を賞翫するは前にいへるごとし江戸には雪の降ざる年もあれば初雪はことさらに美賞し雪見の船に哥妓を携へ雪の茶の湯に賓客を招き青楼は雪燈居続の媒とす酒亭は雪を来客の嘉瑞とす雪の為に種々の遊楽をなす枚挙すべからず雪を賞するの甚しきは繁花の春にもまさるを所と雪国の人ことを見ことを聞て羨ざるはなし我国の初雪を以て一日に比すれば雪を楽と苦と雪泥のちがひこそもくに越後国は北方の陰地なれども一国の内陰陽を前後にいへるとなれば天は西北にたゝなはる西北を陰とし地は東南に足なれば東南を陽とす越後の地勢は西北は大海に対して陽気に東南は高山連りて陰気を受る西北の郡村は雪浅く東南の諸邑は雪深し是陽の前後にあるに似たり我住魚沼郡は東南の陰地にして巻機山・苗場山・八海山・牛ヶ嶽・金城山・駒ヶ嶽・兎ヶ嶽・浅州山等の高山其餘他国に聞えざる山々波濤のごとく東南に連り大小の河々も縦横をなす陰気充満して雪深き山間の村落なれば雪の深さを考べし冬は日南の方を周るに北国は日もまた寒く家の内とても北は寒く南はあたゝかなると同じ道理なり我国初雪を視るの遅と速とは

其年の氣運寒暖につれて均からずといへどもおよそ初雪は九月の末十月の首にあり
我国の雪は鵞毛をなさず降時はかならず粉碎をなす風又これを助く故に一昼夜
に積所六七尺より一丈に至る時もあり往古より今年にいたるまで此雪此国に降ざる事
なしされば暖国の人のごとく初雪を観て吟詠遊興のたのしみは夢にもしらず今年も
又此雪中に在る事かと雪を悲は辺郷の寒国に生たる不幸といふべし雪を観て楽む
人の繁花の暖地に生たる天幸を羨ざらんや

○雪の堆量

余が隣宿六日町の俳友天吉老人の話に妻有庄にあそびし頃聞しに千隈川の辺の雅
人初雪より（天保五年十二月廿五日までをいふ）の間雪の下る毎に用意ある所の雪を尺をもつて
量りしに雪の高さ十八丈ありしといへりとぞ此話雪国の人さへ信じがたくおもへどもつ
らく思量に十月の初雪より十二月廿五日まで、およその日数八十日の間に五尺づつの雪ふるとも
四丈にいたるべし随て下ば随て掃ふ処は積でみるゝ事なし又地にあれば減もあるべく

かれをもつて是をおもへば我国の深山幽谷雪の深事はかりしるべからず天保五年は我国
近年の大雪なりしゆゑ右の話誕ふべからず

○雪竿

高田御城大手先の広場に木を方に削り尺を記して建らる是を雪竿といふ長一丈也
雪の深浅公税に係るを以てなるべし高田の俳友楓石子よりの書翰に（天保五年の仲冬）雪竿を
見れば当地の雪此節一丈に余れりといひ来れり雪竿といへば越後の事として俳
句にもつくれども此国に於て高田の外无用の雪竿を建る処昔はしらず今はなし風
雅をもつて我国に遊ぶ人雪中を避て三夏の頃此地を踏ゆゑ越路の雪をしらず然るに
越路の雪を言の葉に作意ゆゑたがふ事ありて我国の心には笑ふべきが多し

○雪を掃ふ

雪を掃ふは落花をはらふに対して風雅の一ツとし和漢の吟咏あまたあれども
かかる大雪をはらふは風雅の状にあらず初雪の積りたるをそのままにおけば再び下る

雪を添へて一丈ゐあまるゆもあるべ一度降バ一度掃ふのらるをろ是を里言ゐ雪掘とゐふ土を掘ゞごとくもるゆゑゐ斯いくさ掘ざるべ家の用路を塞ぎ人家を埋て人の出べき処もるく力強家も幾万斤の雪の重量ゐ推砕んをゐそるゆゑ家として雪を掘ざるゐゆ掘るゐゆゑゐ木ゆゑ作りくる鋤を用ふ里言ゐてこれをきとゐふ則木鋤に掬とゐふ木をもつて作る木質輕強して折るゆるく且輕し形ハ鋤ゐ似て双廣し雪中第一の用具るべ山中の人ゐをを作りて里ゐ賣家毎ゐ貯ざるハそし雪を掘る状態ハ図ゐわるくくるゲ如し掘さる雪ハ空地の人ゐ妨ゆる処へ山のごとく積上るをを里言ゐ掘揚とゐふ大家ハ家夫を尽して力たらざるをゞ掘夫を傭ひ幾十人の力を併て一時ゐ掘尽を事を急ゐ為もハ掘る内ゐも大雪下るべ立地ゐ堆く人力ゐハかなべざるゆゑ掘る処図ゆ人数を右ハ大家の畧して名げけり るをゐふ小家の貧しきハ掘夫をやとふべ能ゆ費わるべ男女をゐハゞ一家雪をわる吾里ゐくぎてゞ雪ふき処ハ皆然るり此雪ゐくぎくの力をつゐやしくぎくの銭を費し終日わりくる跡へその夜大雪降り夜明てゆきべ元のごとしかる時ハ主人ハさらく下人も頭を低て歎息をつくのみ大低雪ふるごとゐ掘ゆるゐ里言ゐ一番掘二番掘とゐふ

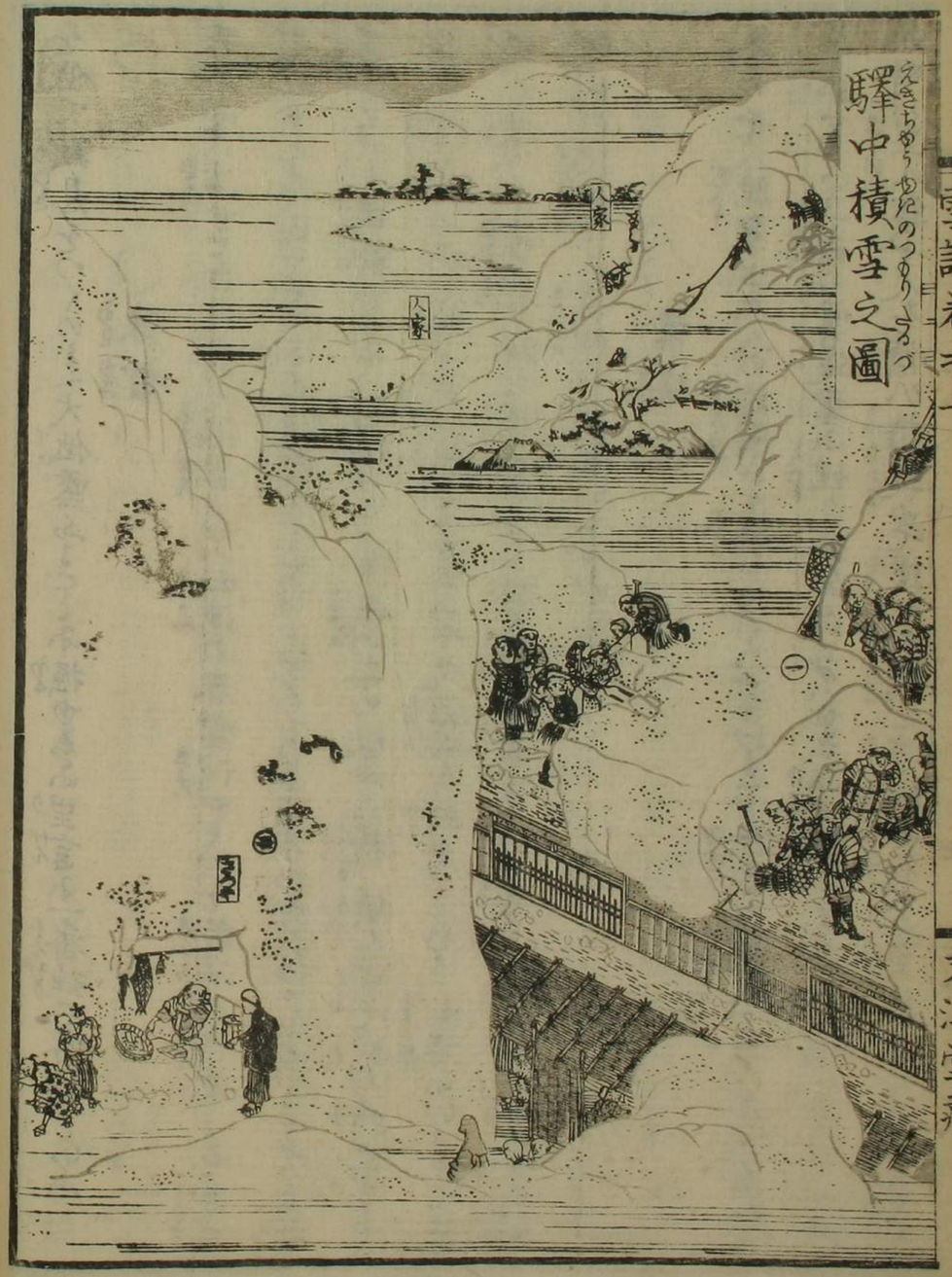
○沫雪

春の雪ハ消やすきをもつて沫雪とゐふ和漢の春雪消やゝ能を詩哥の作意ゝを是暖国のゆゑ寒国の雪ハ冬を沫雪ものゐべしいんとるべ冬の雪ハいろゞつりても凝凍ゝるく脆弱るゆゑ游泥のごとし故ゐ冬の雪中ハ橇縋を穿て途を行里言ゐハ雪を漕とゐふ水を渉る状ゐ似るゆゑゐやゝ又深田を行ごとあり初春ゐいてゝを雪悉く凍りく雪途ハ石を布るごとくるべ往来冬よりハ易し暖国の沫雪と気運の前後かくのごとし

○雪道

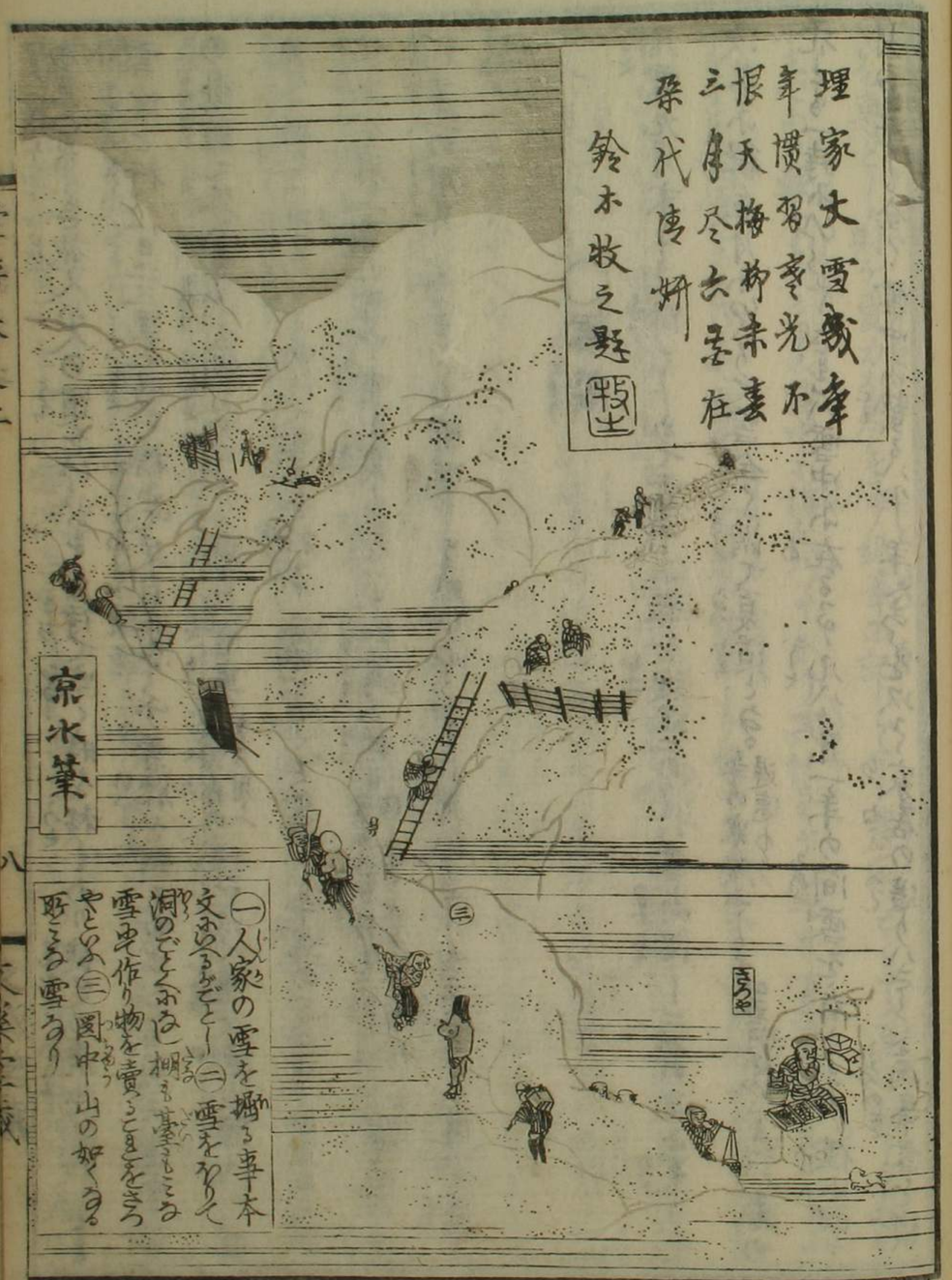
冬の雪ハ脆ゆゑ人の蹈固る跡をゆくハやゝけるゝど往来の旅人一宿の夜大雪降バふゝかるゐる一条の雪道雪ゐ埋り途をしるゐゆゑ郊原ゐいりてハ方位をうしなひ此時ハ里人幾十人を傭ひ撞縋ゆて道を蹈開せ跡ゐ随て行ゝ此費幾緡の銭を費ゝ

驛中積雪之圖



理家大雪戰牽
牽慣習豪光不
恨天梅柳未衰
三春尽六花在
栄代傳州
鈴木牧之題

京水筆



一人家の雪を掘る事本文のごとし　二雪をうりて洞のごとくおほし　棚もる墓もこゝ雪中作り物を賣ることをさろやとゝ　三図中山の如くなる所こゝ雪なり

ゆゑに貧しき旅人は人の道をひらくるを待て空く時を移すもあり健足の飛脚ともいへども雪途を行は一日二三里に過ぎ難ゆて足自在ならず雪膝を越ゆるゆゑに冬の雪中一ッの歎難し春は雪凍て鋏石のごとくなるゆゑに雪車又雪舟の字を以て重を乗せ里人は雪車に物をのせおのれものりて雪上を行ゆ舟のごとくなる雪中は牛馬の足立ざるゆゑまべく雪車を用ふ春の雪中重を負しむるゆゑ牛馬に勝る雪車の制作別に記す形大小種々あり大なるを徳羅といふ雪国の便利第一の用具なれども雪凍りて時にわかるゆゑに用ひがたしゆゑに里人雪舟途と唱ふ

○雪蟄

凡雪九月末より降そめて雪中に春を迎正二の月は雪尚深し三四の月に至りて次第に解五月に入りて雪全く消て夏道となる年の寒暖に依て四五月に入ても春の遅速あり花も一時に開くことなく雪中に在ゆ凡八ヶ月一年の間雪を着ざるゆゑ僅に四ヶ月なれども全く雪中に蟄るは半年なれば家居の造りはさらに萬事雪を禦ぐを専とし財を費し力を尽すゆゑに紙筆に記しがたし農家はとくに夏の初より秋の末までに五穀を収るゆゑ雪中に稲を刈ゆゑ其忙しきゆゑの千辛万苦暖国の農業に比すれば百倍なるべし雪国に生る者は幼稚より雪中に成長するゆゑ蟄中の苦辛をものともせずして雪を雪とも思はざるは暖地の安居を味ざるゆゑなり女は十人に七人は是なれども住は都にて繁花の江戸に奉公するゆゑ後雪国の故郷に帰る者あれども又十人に七人は胡馬北風に嘶き越鳥南枝に巣くふ故郷の忘しがたきは世界の人情なれども雪中は廊下に雪垂をかけ下に雪吹を防ぐ窓も又店下にて雪を用ふ雪降る時は巻て明を取る雪下ゆゑ厳ゆる時は積る雪家を埋て雪と屋上と均く平なり明のとぼしき処ゆゑに昼も暗夜のごとく燈火を照して家の内は夜昼をわかつ漸雪の止る時雪を掘て僅に窓をひらき明をひく時は光明赫奕たる仏の国に生るごとし此外雪籠りの艱難さまざまあれども去るもあれど一定なるべし雪中に籠り居て鳥獣は雪中食无をもとして雪浅き国へ去るもあれど一定なるべし雪中に籠り居て

朝夕をうもるものハ人と熊犬猫ん

○胎内潜

宿場と唱る所ハ家の前ハ庇を長くのべて架る大小の人家もさこかくのごとく雪中ハ
きゝこと平日も往来ともとこふよりて雪中の街ハ用ゐるゞ如くうまゞ人家の雪をとゝ積次
第ハ重て両側の家の間ハ雪の堤を築さるゞ如くとゝ於て所こゝハ雪の洞をひらき庇より庇
ハ通ふこゝを里言ハ胎内潜とのふ又間夫ともいふ間夫とハ金槌の方言なるを借て用ふるこ
間夫の本義ハ妻妾の姦淫をいふ　宿外の家の続ざる処ハ庇なゞきバ高低をなゝるかの雪の堤を往来
とも人の足立ざる処わきバ一条の道を開き春ハいとり雪堆き所ハ壇層を作りて通
路の便とこゝ形匣階のごとく所の者ハこゝを登下もるハ脚ハ慣て一歩もあやまるなく
他国の旅人なゞハ怖ゝ移歩かつて落る者あり　おつまゞ雪中ハ身を埋む視る人ハ
こゝを笑ひ落るものハこゝを怒るかゝる難所を作りて他国の旅客を労ハしむるゆ
求る所為ハ〻〻此雪を取除ともるハ人力と銭財とを費ものゑす導ハ壇状

作りて途を開くこそ〻〻初雪より歳を越て雪消るまでの事紙繁細ハ記さバ小冊
ゆ尽しがたゝゆゑハ省て略ることゝる事甚多し

○雪中の洪水

大小の川ハ近き村里初雪の後洪水の災ハ苦むるゆあり洪水を此国の俚言ハ水
揚といふ余一年関とのふ隣驛の親族油屋が家ハ止宿せし時頃ハ十月のそゝめ
ゆく雪ハ九尺つもりくるをうゝしゞ夜半ハいとりて近隣の諸人呼び呼りて立
騒ぐ声ハ瞬を驚しこハ何ゆゑやんと胃もをどりて臥る間をそもゝゞけバ家の主両
手ハ物を提水わゞりくとく裏の掘揚へ立退のくとのひきて持る物を二階へ運びゆく
勝手の方へ立のゞてこゝを家内の男女狂気のごとく駈まハりて家財を水ハ流さゞと
手當もゞいハ取退る水ハ低ハ随て潮のごとくおしきたり已ハ席を浸し庭ハ満る次第
ハ積る雪所として雪ゆゑなるハゆゑ雪光暗夜を照して水の流るゝあるさまハ
いとゝんとゝ〻余ハ人ハ助けるまて高所ハ逃登り遥ハ驛中を眺バ提灯炬を燈しつゝ

大勢の男ども手くゝれ木鋤をとゝげ雪を越水を渉て声をあげくてゝ来るあるハ水揚せぎる所の者どもてゝ馳あつまりて川筋を開き水を落さんとするに闇夜わく もぐ〳〵ハ又えもゝど女童の泣叫ぶ声或ハ遠く或ハ近く聞もわハるのあり さゝ〳〵燃残りくる炬火をたよりゝ人も馬も首さけ水ゝ浸り漲るゆゑをわたりゆくハ馬を助んとするに帯もせざる女片手ゝ小児を脇負提灯を提て高処へ逃のゞくハ近けるゝ そこらあくゝふゝゝも命とつりゞくゝるゝゝをも恥くくハおもへくゝゝ可笑事可憐なるゝ可怖きゝゝ稚くさゝめく筆ゝ尽くゝ〳〵ゆくく東雲の頃ゝ至りて水も落くりくゝ諸人安堵のおもひをなすぬ○そもく我郷雪中の洪水大くくハ初冬と仲春とゝあり此関とゝの駅ハ左右人家の前ゝ一道づゝの流あり末ハ魚野川へ落る三伏の旱ゝも乾くゝゝゝ清流水とゝゝ家毎ゝ此流を以て井水の代りとす もゝも桶ゝて汲ゝ流るゝゝ平日の便利井戸よりもまさるゝ勝りまるゝ初雪の後十月のころまでゝゝの二條の小流雪の為ゝ降埋らるゝ流水ハ雪の下ゝあり故

小家毎ゝ汲べき程ゝ雪を穿て水用を弁ずるゝ穿る所も一夜の雪ゝ埋らるゝゝとあるゝ再うづるゝ屢ゝあり人家ゝ近ゝ流さくのごとくるゝゝの二條の流の水源も雪ゝ埋るゝ水用を失ふのゝるゝゝ水わづりの懼あるゝ所の人力を併て流のかゝりゝの雪を穿るゝゝりさるゝども人毎ゝ業用ゝさくゝ時を失ふゝ又ハ一夜の大雪ゝかの水源を塞ぐ時ハ水溢て低所を尋て流る驛中ハ人の往来の為ゝ雪を踏へして低ゝ流水漲り来り猶も溢て人家ゝ入り水難ゝ逢ゝ前ゝ引くるごとく幾百人の力を尽くして水道をひらくゝゝゝ家財を流し或ハ溺死ゝおよぶもあり○又仲春の頃の洪水ハ大くくハ春の彼岸前後くゝ雪いまゞ消ず山くハさくゝ田圃も渺くゝる曠平の雪面ゝゝゝ枝川ハ雪ゝ埋るゝ水ハ雪の下を流るゝ大河とゝども冬の初より岸の水まづ氷りて氷の上ゝ雪をつもくゝせつる雪もゝゝくく氷りて岩のごとく岸の氷りゝる端次第ゝ雪ゝ凍つもりのちゝゝ両岸の雪相合くて陸地とゝゝ雪の地とゝるゝて春を迎て寒気次第ゝ和くぎその年の暖気ゝつるゝて雪も降止る二月

雲中洪水の之圖

京水華

の頃水気ハ地気よりも寒暖を知るゆえきの面ハかの水面ハ積りする雪下より解て凍りする雪の力も水ハちら沢ハ弱くなり流ハ雪ハ塞まて狭くなりする面ハ水勢まもく烈しく陽気を得て雪の軟なる下を潜り堤のきるごとく瀉ハいふ寝耳ハ水の災難ハあるゆ雪中の洪水寒国の艱難暖地の人憐ぬべし　右ハ其一をいふのみ雪中の洪水地勢ハよりて種々各々あり詳ハ弁ずべし

○熊捕

越後の西北ハ大洋ハ對して高山ゆえ東南ハ連山巍々として越中上信奥羽の五ヶ国ハ跨り重岳高嶺肩を並べて数十里をへだてる大小の獣甚多し此獣雪気を避て他国へ去るもありさるもあり動ずして雪中ハ穴居するハ熊のごとく熊膽ハ越後を上品とす雪中の熊膽ハことさらハ價貴し甚重價を得んと欲して春暖を得て雪の降止るころ出羽あたりの瞰師ども五七人心を合せ三四疋の猛犬を牽き米と塩と鍋を貯へ水と薪ハ山中在るハ隨て用をゆ山より山を越昼ハ猟して獣を食

と夜ハ樹根岩窟を寝所とゆ生木を焼て寒を凌且明とゆ着さまく寝所をゆ頭より足ハいるまで身ハ着る物悉く獣の皮をもつてこれを作る遠く視ればハ猿ハ人也金華を衽ゆもとハかる人をいふ此者らハ志所ハ我国の熊ハありさて我山中ハ入り場所よきを見立木の枝藤蔓を以て假ハ小屋を作りこれを居所とゆ犬ハ犬を牽四方ハ別て熊を窺ふ熊の穴居する所を認ハ目幟をのこして小屋ハ入り一連の力を併て熊を捕るその道具ハ柄の長さ四尺ハ手鎗或ハ山刀を雑刀のごとく作りするの鉄砲山刀斧の類と刀鈍る時ハ砥ハ砥をもつて自研ぐ此道具も獣の皮を以て鞘とする此者ら春ハもかぎらず冬ハ山ハ入るをりもあり

そもく熊ハ和獣の王猛くして義を知る菓木の皮虫のるゆを食として同類の獣を喰ず田園を荒ず稀ハ荒ハ食の尽する時ハ詩経ハ男子の祥とし或ハ六雄将軍の名を得るも義獣なるべし夏ハ食をもとめるの外山峨を掌中ハ捺着冬

の蔵塾ハこゝを鍬くゝ飢を凌ぐ牝牡同く穴ハ蟄らゞ牝の子あるハ子とゝ
ゞくこゝる其蔵塾をる所ハ大木の雪頽ハ倒るゝ朽る洞下ハ石ゝ又ハ岩間土
穴るゞ心ハ随ゝ居る処さゞめゞゝ雪中の熊ハ右のごゝく他食を求ざるゆゑその
膽の良功あるゆ夏の膽ハ比ゞ百倍ゝ我国ハ・飴膽・琥珀膽・黒膽と唱へ色を
もつゝこゝをゝハ琥珀を上品とゝ黒膽を下品とゝ偽物ハ黒膽ハ多ゝ

●さて熊を捕ハ種ゝの術ありかゞ居所の地理ハ考ゞて捕得ゞを紀術をゞゝ
熊ハ秋の土用より穴ハ入り春の土用ハ穴より出ることゝハ又一説ハ穴ハ入りてより穴を
出るまで一睡ハ経ることゝハ人の視ざることゝろゆゑゞ信ゞゝ

沫雪の條ハいゝるごゝく冬の雪ハ軟ハゝく足場ハ悪ゆゑ熊を捕ハ雪の凍る春
の土用まゝゝゞ穴ゝりハぞんゝゝる頃を捉ゝき時節とゝる岩壁の裾又ハ大樹の根
ゞゝどハ蔵塾ゝるを捕ハ壁ゝゝハ術を用ふ天井釣ゝもハふその制作ハ木の枝藤の
蔓ハゝく穴ハ倚掛ゝく棚を作りたゝの端ハ地ハ付ゝく杭を以ゝくこゝを縛りたゝの

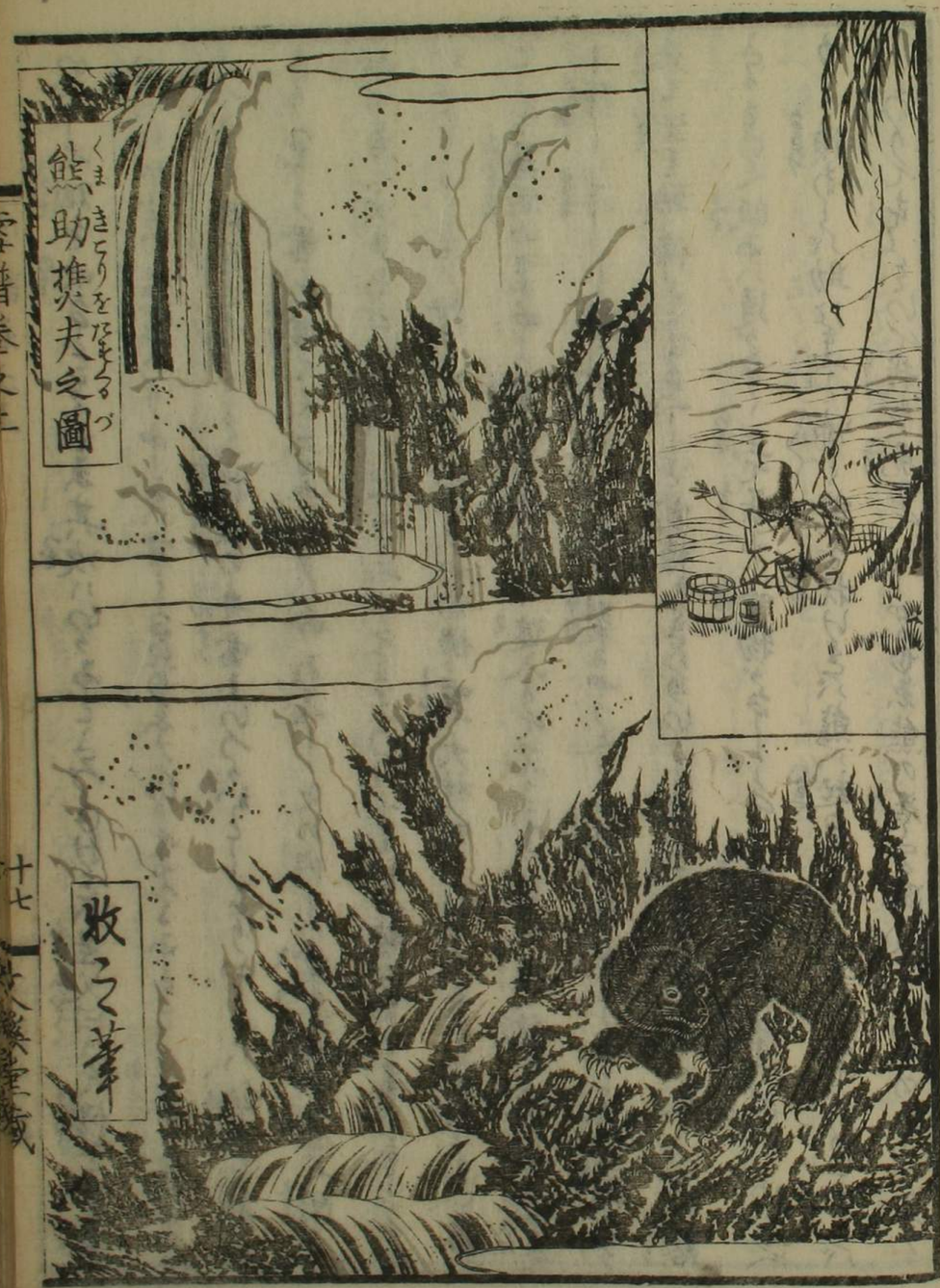
横木ハ柱ありて棚の上ハ大石を積ゝゝゞ横木より縄を下ゝ縄ハ輪を結ひゝく
穴ハ臨ゝこゝを蹴綱ゝゝハ此蹴綱ハ轉機あり全く作りをゝりてのち穴ハのぞん
で玉蜀烟竹の莖のゝる熊の悪む物を焚ゝきゝりハ扇ゝく烟を穴ハ入るゞ熊烟りハ
噎ゝく大ハ怒り穴を飛出る時かゝゝゞゝの蹴綱ハ觸るゞ轉機ハゝく棚落て熊大石
の下ハ死ゝ手を下さゝゝく熊を捕の上術ゝ是ハ熊の居所ハよるゝこゝゝハ樵夫を
折ハよりてハゝるゝ

又熊捕の場数を踊る剛勇の者ハ一連の獵師を熊の居る穴の前ハ待せ己一人
ひゝく蓑を頭ゝり被り（ハ山ハ住る竹の名ゝゝのハ作ゞ穴ハそゝゝと這入り熊ハ
稿ゝゝる）獵師共ハこゝを用ふ
蓑の毛を觸ゞゞ熊ハゝの毛を嫌ふゝのゆゑ除て前ハゝゝ毛又後ゝりゝの毛を障ゝ
熊又ゞ（ハゝゝむ又さハり又ゝんゞ熊終ハ穴の口ハいゝるゝこゝを視ゝく待かゝ（ゝる
獵師ども手練の鎗尖ハゝけて突出る一鎗失ゝゝゝ熊の一撲ハ一命を失ふその危を
踊ゞ熊を捕ハ僅の黄金の為ゝ金慾の人を過るゆ色慾よりも甚ゝ（ゝゞゞ黄金ハ

道を以て得べし道をもつて得べらんか
又上ハ覆ふ所あり下ハ雪のつもらざるを知り土穴を掘て蟄るもあり然
どもこれも雪三五尺ハ吹積て熊の穴ある所の雪ハ一ぢ細孔ありて管のごと
こゝ熊の気息ゆゑ雪の解る孔ゝ猟師こゝをうかゞへバ雪を掘て穴をあらハし
木の枝柴のるゐを穴ハ挿入まゝ熊こゝを揆とりて穴ハ入るゆゑ木ハ
ハ穴逼りて熊穴の口ハいづる時鎗ハかゝる突とりこゝをまゝ数疋の猛犬いちどハ飛かゝ
て齧つく犬ハ人を力とゝ人ハ犬を力とゝ殺もあり此術ハ控木ハ
もるゐ

○白熊

熊の黒ハ雪の白ごとく天然の常なゝ天公機を轉じて白熊を出せり
○天保三年辰の春我ら住奥沼郡の内浦佐宿の在大倉村の樵夫ハ安山ハ入り
時いろふ〜て白き児熊を虜り世ハ珍とゝ飼いきゝハ香具師ハ見世もの
師の古風なるもの



いぶせて烟を吹ゐどる由其次ハいろゐとろぶけまバ老父曰さて傍を見まバ潛ぜたりどの岩窟あり中ゐハ雪もなゐ由ゑたりて入るゐもとこ温く此時ハろづきく腰をさゞりとるゐ握飯の弁當もいつゐとこりかくてハ飢死まぞ一さりゐゞ雪を喰ても五日や十日ハ命あるべしその内ゐハ雪車哥の声さ聞まバ村の者ゝ大声あげて叫らバ助くるべしそまゐつけてもゐ伊勢さゐと善光寺さゐを

かくものゝ中よりわゐゐとあきりゐ念佛唱へ大神宮をいのり日もくるかりしゐ由ゑこゝを寢所ゐせゞやと闇地を探りく這入りてゐるゐ次第ゐ温く猶も探りく手先ゐ障りハ正しく熊く愕然して胴も裂るやうこゞ逃ゐ道ゐくくても命の期ゐり死も生も神佛ゐまゐ任べしと覺悟をきゐめいゐゐ熊どの我ハ薪とりゐ来り谷へ落るものゝ飯ゐハ道ゐゐく生て居ゐハ喰物ゐゐしても死ぬ命ゝ擘て殺バこゝろのく情あゝバ助なまくと怖く熊を抚けまバ熊ハ起ゐりゐるやうゐそわしゐがもバしゐありてもくゝいゐ我を尻ゐてかりゐる由ゑ熊の居ゐる跡へ坐しゐたのあゝゐゐ

ゐ巨燵ゐわゐるゐとく全身あゝてまゐりて寒をゐとゐまゝ由ゑ熊ゐさゐゐく礼をのべ猶もたをけ玉へと種ゝ悲しく泣ゐを見ひしゐ熊手をあげく我が口へ柔ゐあゝてゐるゐなびくくしゐ由ゑ城のゐをもひゞゝ紙くゝまバ耳くてもとゝ苦しき意ゐりゐゐ宜バ心爽ゐゐり咽も潤ひしゐ熊ハ鼻息を鳴して寢やうくさてハ我を助るゐゝと心大ゐゐちつきのちハ熊と脊をゐくべく卧しゐ宿のゐをのゝちひて眠気もつゝびくくひくくとのちハいつゐ寢入りかくて熊の身動をきてゐる月日さめてゝまバ穴の口ゐんゐゐ由ゑ夜の明ゐる気ゐり穴をゐひいゞゝやゐるべき道もあるゐ山ゐのゐるべき藤づるゐもあるゝとあちこちゐまどゐるゐ熊も穴をいでて滝壺ゐいてり水をのゝ

しゐ時ゐとめて熊を見まバ犬を七ツもよせるゐとの大熊ゝ又ゐとの窟へ入りゝ由ゑ我ハ窟の口ゐ居く雪車哥のこゑやもてゝんと耳を澄して聞居ゐりゝゐ滝の音のゝゐて鳥の音もきゝバその日もくゝ暮ゐ又穴ゐ一夜をあゐゝ熊の掌ゐ飢をゐのゐ幾日ゐゐても哥ハきゝバその心細きゐゐいんゐゐゐゐゐまゐ熊ハ次第ゐ馴

可愛がりしと語りき。主人は微酔にて老夫にむかひ其熊は牝熊ではなかりしかといひければ三
人大ひに笑ひ又酒をのませ盃の献酬にしばらく話消けるが強て下回をたづねければ
老夫曰人の心は物にふれてかはるものなれば熊に逢し時はもはや死地におちしと覚悟を
きはめ命も惜くなかりしが熊に助られてのちは次第に命がをしくなり助る人はなく
とも雪さへ消なば木根岩角に縋てなりと宿へかへらんと雪のきゆるをのみまちわびし幾日
といふ日さへ忘て虚くくらしけるが熊は飼犬のやうになりてそれとなく人間の貴きを知り
谷間なる雪のきゆるも里よりは遅くして日のたつをのみまちしに一日窟の口の
日のあたる所に蝨を捫て居たりし時熊窟よりいで袖を咥て引しゆゑいかにするぞと引れ
ゆきしにそれより滞落なきやうに熊前にたちて自在に雪を掻掘一道の途をひ
らく何方までもとおもひさけば又途をひらきつゝ人の足跡ある所にいたり熊四方を
顧て走り去て行方しれずさてこそ我を導たるなりと熊の去し方を遥拝かたじけなく礼を
のべあまりまつさく神佛の御蔭ぞとお伊勢さま善光寺さまを遥拝ありしくて足の

踏所もしらず火點頃宿へかへりしに此時近所の人々あつまり念仏申ておはり両親
それがし喟然せしは幽霊ならんとて立さわぐそのさまの月代は蓑のやうにのび面は狐
のやうに痩たり幽霊とて立さわぎしものちは笑となりて両親はさらなり人々もよろこび
薪とりにいでし四十九日目の待夜とていとなみる佛事も俄にめでたき酒宴となり
しと仔細に語りしは九左門といひし小間居の農夫にて其夜燈下に筆をとり
て語りしまゝを記しおきしが今はむかしとなりけり

○雪中の虫

唐土蜀の峨眉山には夏も積雪あり其雪の中に雪蛆といふ虫ある事山海経に見
えたり唐土の書此説空からず越後の雪中にも雪蛆あり此虫早春の頃より雪中に生じ
雪消終れば虫も消終る始終の死生を雪と同うす字書を按に蛆は腐中の蝿とあれば所
謂蛆蝿の蛆は蠆の類人を螫とあれば蜂の類也雪中の虫は蛆の字に从べしあるひは雪蛆
は雪中の蛆蝿也木火土金水の五行中皆虫を生ず木の虫土の虫水の虫は常に見る所らず

らしらくもぢ蠅ハ灰より生ぜ灰ハ火の燼末こゝろまゝ蠅ハ火の虫こゝ蠅を殺して形あるもの灰中
わかけば蘇こゝ蚉ハ人の熱より生ぜ熱ハ火こゝ火より生ずる虫也ゆゑ蠅も蚤も共ハ暖ある紙
さのむ金中の虫ハ肉眼ハ見ざる冥塵のごと紙虫也ゆゑ人こゝを去らぬ、あゝ銅鐵の腐
もしめハ虫を生ぜ虫の生ずる所色を変ぜ去ばくこゝを拭ば虫をころゝ也ゆゑ其所腐ゝ錆
ハ腐の始錆の中から〳〵虫あり肉眼ハ見ざるゆゑ人知らざる説 蘭人の金中猶虫あり雪中
虫無んや去らぬども常を変ずゝ奇とし如ゝ唐土の昼ハも記せり我越後の雪蛆ハ
ちひさ紙るの蚊の如ゝ此虫ハ二種あり一ツハ翼ありて飛行一ツハ孫あゝ蔵こゝ蚊行共
ハ足六ツあり色ハ蠅ハ似て淡く一ハ黑ゝ其居る所ハ市中原野蚊ハ去らぬども

○雪蛆の圖

此虫夜中ハ雪中ハ凍死して日光を得ばさちまち

人を螫むゝハあらぬ驗微鏡ハこゝ
視る所をこゝハ図ゝて物産家の
説を俟つ

○雪吹

雪吹ハ樹ゝのごハ積りこゝる雪の風ハ散乱こゝるをいハ其状優美りのゆゑ花のちるを
是ハ比ゝて花雪吹こゝいひく古哥ハもあまこゝえこゝり是東南こゝ雪の国のゆゑ
北方こゝ雪の国我が越後の雪深こゝろの雪吹ハ雪中の暴風雪を巻騰飛こゝ雪中第一
の難義こゝ也こゝ人年こゝの一ツを挙こゝこゝハ記ゝ雪の雪吹のゆゑ〳〵ゝを
観人の為ハ文雪の雪吹の愕貽を示こゝ
余が住塩澤ハ遠らぬこゝる村の農夫男一人あり篤実ハこゝて善親ハ仕ふ廿二歳の冬
二里あまり隔こゝる村より十九歳の娵をむかへこゝハ容姿憎らぬ生質柔従ゆゑ糸織
の技ハも伶利こゝ也ば男姑も可愛こゝり夫婦の中も睦く家内可祝春をむかへ其年
九月のこゝめ安産こゝて去らぬも男子こゝりこゝ也ば掌中ハ珠を得こゝる心地ハこゝ家内
悦びいさゝ産婦も健ハ肥立乳汁も一子ハ餘こゝる也ば小児も肥太り可賀名を
つけく千歳を寿けり此一家の若ゝ篤実こゝ也ば耕織を勤行小農夫こゝ

も負うゝぶ善男をもち良嫁をむゝ（好孫をまうけうとて一村の人ゝ常ゝ羨うゝ
かゝる善人の家ゝ天災を下ゝ給ハ如何ぞや○かくて産後日を歴てのち連日の雪
も降止天気穏なる日嫁夫ゝむかひ今日ハ親里へ行んとおもふいうゆやせんとゝふ勇
旁ゝおりてそハよゝ紀子ゝ男も行ゝ実母へも孫をゝせうとゝこぶせ夫婦ゝ〻〻自
慢せうとゝふ嫁ハうちゝゝつ姑ゝかくとゝ（ば姑ハ俄ゝ土産なゝど取そろゝ間ゝ嫁
髪をゆひなゝして嗜の衣類を著ゝ綿入の木綿帽子も寒国の習ゝ見ゝく
うゝぶ児を懐ゝいゝ紀入んとするゝ姑亭ゝうゝ乳を呑せていゝ紀いまゝ途ゝ
てハ祝ん祝ゝのこゝふくゝうんと一言の詞ゝも孫を愛する情ゝあゝまるる夫ハ蓑笠
搗脚衣もんべを穿晴ゝも養を著ハ土産物を軽荷ゝ擔ひ両親ゝ暇ゝをゝ
夫婦袂をつゝ祝喜躍て立出ゝり正是親子ゝ一世の別ゝ後の悲難ゝハ
けり○さるゝどゝ夫ハ先ゝ立妻ハ後ゝ忘ゝとゝひゆゝをつゝとつまゝいふ今ゝハ頃日の
日和ゝよゝくゝそゝかゝひゝちゝゝゝ今日夫婦孫をつゝれゝ来るゝ〻〻ゝハ親ゝ

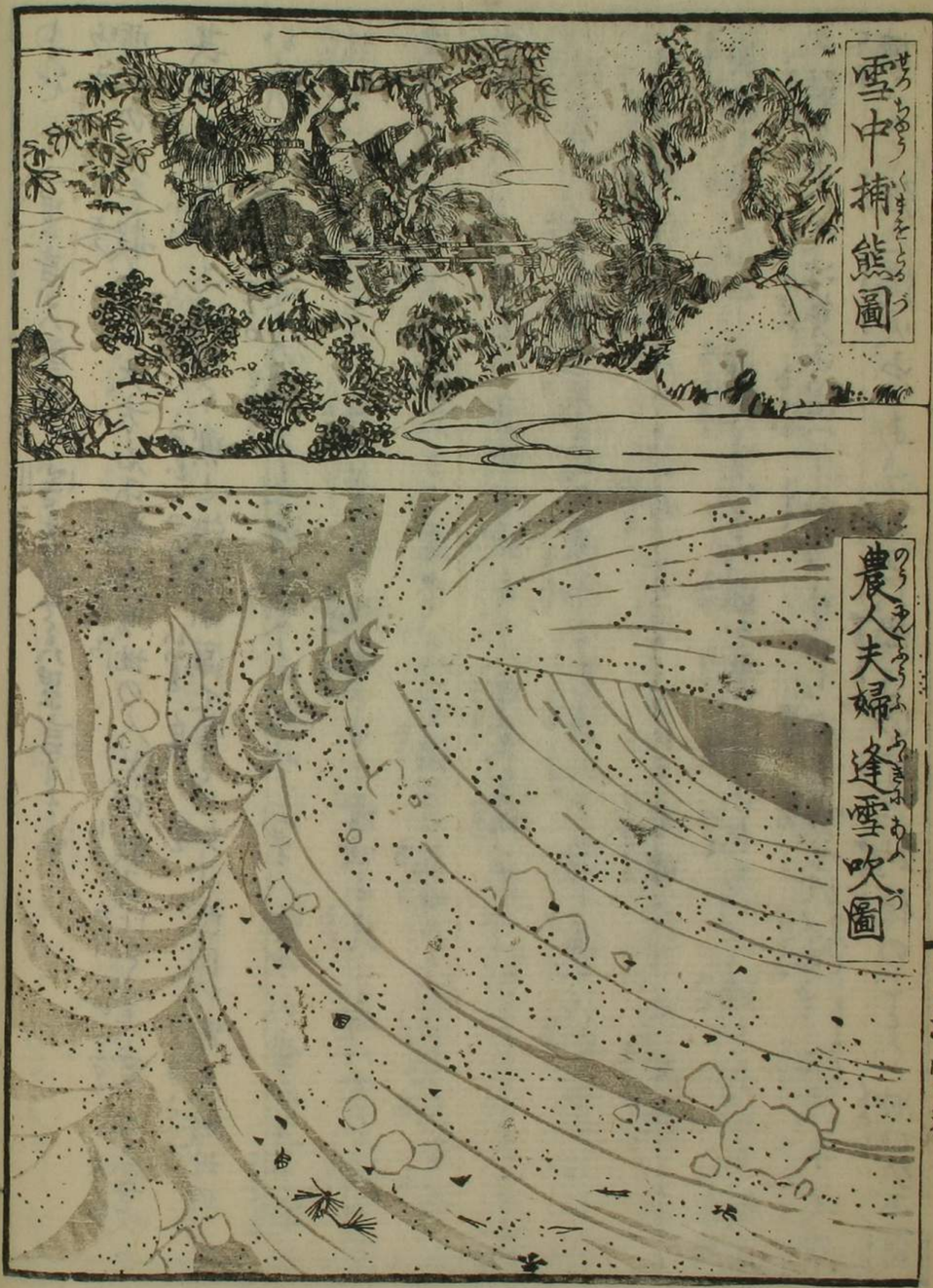
ゝ玉ふまゝ孫の顔を見玉ハぐさぞゝゝよろこびのふんさゝバゝハい父翁ハいつ
ぞや来らゝゝゝゝ母人ハいまゝ赤子を見ぬハざるゝゝゝゝゝの喜悦ゝうん遅
ゝゝゝバ一病てもゝうんゝ郎も病ぬ〻不可也二人とまりゝバ両親案ぬいんゝゝハ
飯ゝゝゝゝゝゝゝの間児の啼ゝ乳房くゝませつゝうちつゝて道をいそぐ美佐嶋と
いふ原中ゝ到ゝ時天色倏急ゝ寒り黒雲空ゝ覆ひけゝバ是雪中の常ゝ夫空を見ゝ
大ゝ驚怖ゝハ雪吹ゝうんいゝゝハせんと跟蹤ゝうち暴風雪を吹散ゝ巨濤の岩を越
るゝごとゝ颯雪を巻騰て白竜峯ゝ登ゝごとゝ朗ゝゝゝも掌をゝ〻ごとゝ天
怒地狂寒風ハ肌を貫の鎗凍雪ハ身を射の箭ゝ夫ハ蓑笠を吹とゝゝ妻ハ帽子を
吹ちぎゝゝゝ髪も吹ゝぎさゝ吐嗟ゝゝふ間ゝ眼口襟袖ハさゝゝ裾ゝも雪を吹いゝ全
身凍呼吸迫り半身ハ已ゝ雪ゝ埋めらゝゝゝゝ命のゝぎりゝゝゝゝバ夫婦声をあげ
ゝゝゝゝゝと哭叫ども往来の人もゝゝゝ人家ゝも遠けゝゝバ助る人ゝく手足凍て
枯木のごとゝ暴風ゝ吹僵ゝ夫婦頭を並て雪中ゝ倒ゝ死けり此雪吹其日の

文政堂蔵

暮ふ上次日ハ晴天なりけるバ近村の者四五人此所を通りかゝりしふの死骸ハ雪吹ふ埋らるゝ之えざるとも赤子の啼声を雪の中ふきゝけるバ人〻大ふ怪こゝろをて逃んとするも在しが剛気の者雪を掘こゝるふまづ女の髪の毛雪中ふ顕うり扨ハ昨日の雪吹倒るゝ人ふ里言ふ所とて皆あつまりて雪を掘死骸を見るふ夫婦手をあひく死居り児ハ母の懐ふあり母の袖児の頸を覆ひ〻るバ児ハ身ふ雪をバ鰹ざるゆゑふや凍死ぞ両親の死骸の中ふゝ又声をあげてなきゝり雪中の死骸ふるバ生るがごとく見知る者ありて夫婦なることをゝり我児をいゝゝく袖をおゝひ夫婦手をとるゝこゝぐ〻して死る心のうちかなしやまてさもゞの若者ら も泪をおとし〻児ハ懐ふいるバ死骸ハ蓑ふつゝみ夫の家ふ荷ひ込りゝの両親ハ夫婦嫁の家ふ一宿とあこいなひをり〻ふ死骸をえて一言の詞もなく二人が死骸ふとりつ紀額ふくゝをかゝあて大声をあげて哭るハ見るも憐のありさまゝ一人の男懐より児をいだして姑ふ〻て〻けるバ悲と喜と両行の涙をおとし〻けるとぞ

〈里言ふ雪吹を雪ゝとゝふゝ〻ハ里言ふ所ゝ

雪吹の人を殺ゝるゆ大方右ふ類も暖地の人花の散ふ比く美賞ゝる雪吹と其異こと潮干ふ遊びく楽と洪濤ふ溺て苦しゝの如し〻雪国の難義暖地の人おもひやるべし〻連日の晴天も一時ふ変じて雪吹とゝるハ雪中の常〻其力樹を抜屋を折人家こゝ〻為ふ苦むゆ扨拳ゞし〻雪吹ふ逢ゝる時ハ雪を掘身を其内ふ埋るバ雪暫時ふつゝり雪中ハゝ〻つて温ゝる気味ありて且気息を漏し死をまぬがるゝゆあり雪中を歩ゝる人陰嚢を綿ふ巻つゝゆをゝゝるせざれバ陰嚢まづ凍て精気尽ゝる又凍死ゝるを湯火をもつて温るバ助るゆあるゝも武火熟湯を用ふべからざる命ゝゝゝるのち春暖ふいゝるバ腫病とゝるゝ良医も治し〻凍死ゝるハまづ塩を熬て布ふ包ゝ〻膝をあゝゝめ搞火の弱をもつて次第ふ温し〻助りゝるのち病を発せ〻人肌ゝく温ハ手足の凍ゝるゝも強き湯火ゝてあてるバ陽気いゝるバ灼傷のごとく腫つひふ膚


雪中捕熊圖

農人夫婦逢雪吹圖

京水筆

て指をおとせど百薬効なしこと我が見る所を記して人に示せ人の凍死せるも手足の亀手も陰毒の血脈を塞ぐのゆゑ俄に湯火の熱を以て温めば人精の気血をたすけ陰毒一旦に解るとのべども全く去ず陰は陽に勝ざるを以て陽気至れば陰毒内に暈て腐ゆ寒中両雪に歩行て冷る人急に湯火を用ふべからず已が人熱の温ゆゑにもるをまつて用ふべし長生の一術なり

○雪中の火

世に越後の七不思議と称する其一ツ蒲原郡妙法寺村の農家炉中の隅石臼の孔より出る火人皆奇とす碑に つゝ諸書に散見せり此火寛文年中始て出しと旧記に見えたれば三百余年の今に消て絶るゆゑに奇中の奇と天奇を出せる一ツ也 国の奥沼郡に又一ツの奇火を出せり天公の機状の妙法寺村の火とおなじ彼人の知る所是は他国の人の去らざる所なれば記て話柄とす

越後の国魚沼郡五日町より驛に近き西の方に低き山あり山の麓に小溝在天明年中二月の頃その辺の童どもあつまりてさゝぐの戯をなして遊倦木の枝をあつめ火を焚てあそびをりしに其所より火出て別に火談とし燃あがりければ児曹大に驚き皆四方に逃散けりその中に一人の童家に入り事の仔細を親に語るに此親心ある者にてその所に行て火の形状をみるに いまだ消ざる雪中に手を入るべきなどの孔を穿て孔より三四寸の上に火燃る熟覧ありしに正しく妙法寺村の火のごとし火口に石を入て是を消し家に入りて人に語ば雪きえてのち再その所に行てみるに火のもえるは小溝の岸に火燵をなして裴燭に火を点じ試に池中に投いまし池中火を出せしなり庭燎のごとし水上に火燃るは妙法寺村の火よりも奇とす驛中の人と来りて是を視るそのち銭に才人かの池のなを りに混屋をつくり筧を以て水をとるごとくして地中の火を引き湯槽の竈

ふ燃し又燈火にも代る池中の水を湯ふ煙し價を以て浴せしむ此湯硫黄の気ありて能痂癬の類を治し一時流行して人群をなせり ○按ふ地中ふ水脉と火脉とあり地ハ大陰なるゆゑ水脉ハ九分火脉ハ一分なりかゝるゆゑふ火脉ハ甚稀し地中の火脉凝結ところなくして気息を出せる人の気息のごとく肉眼ゆハ見えず火脉の気息ふ人間日用の陽火を加へばたちまち燃をなすことを陰火とのひ寒火とのふ寒火を引ふ筧の筒の焦ざるハ火脉の気いまだ陽火をうけて火となるべきの気息なり然るゆゑ陽火をうくるゆゑ筒の口より一二寸の上ふ火をなすことを以て火脉の気息の燃るを知るべし妙法寺村の火も是と是余ゞ幾明ふあらず古書ふ據て考得る所と

○破目山

魚沼郡清水村の奥ふ山あり高さ一里あまり周圍も一里あまりと山中もべて大小の破隙あるを以て山の名とす山半ハ老樹條をつゝ林半より上ハ岩石疊ことして其形竜躍虎怒ゲでらく奇く怪く言ひつゝず蘖の左右ふ渓川あり合して滝をなす絶景又言ひつゝず旱の時此滝壺ふ雪ありて験あり一年四月の半雪の消する頃清水村の農夫ら二十人あまり集り熊を狩んとて此山ふのぼりうの破隙の窟をのぞくる所なるゆゑ熊の住處なりと例の蕃椒烟草の葉を薪ふ交窟ふのぞんで焚くしふ熊ハさゝふ出ず窟の深なるふ烟の奥ふ至らざるなりと次日ハ薪を増し山も焼よと焚るふ熊ハ遂ふ一山の破隙てかことより烟をいざて雲の起ゲ如くなりけるハ奇異のおもひをなし熊を狩ずして空しく立ちかへりしと清水村の農夫ゲ語りぬ扨もふ此山半より上ハ岩を骨として肉の土薄く地脉気を通じて破隙をなすゆゑ天地妙工の奇工思量ばかりべ

○雪頽

山より雪の崩頽を里言ふ[illegible]と[illegible]ふ按ふ[illegible]ハ撫下るくるを[illegible]と[illegible]ふハ活用ことばなり山ゆもふことゆハ雪頽の字を借く用ふ字書ふ頽ハ暴風

三國嶺雪頽の上往來の圖

玉屑團成三國峯
寒光遶骨難移節
何人寵雪双花月
棧徑凌雲蹈白龍

京山人題

そぞろのうくをかきて

京水筆

ともあまたびとく叶つるゆゑさて雪頽ハ雪吹ホ双て雪国の難義とス高山の雪ハ里より遠く深く凍るも又里よりハ甚〳〵我国東南の山〳〵里ホちかきも雪一丈四五尺ヲ
ハ浅〳〵と云此雪こゝりて岩のごとくなるもの二月のころホいたれバ陽気地中ヨリ
蒸〳〵解んとスル時地気と天気との為ホ破て響をなス一片破て片〳〵破る其ひゞき
大木を折ごとく〳〵こと雪頽んとするの崩ス山の地勢と日の照をとホりてヲ
だるく処となるべきさる処ありなるハ二月ホわり里人ハその時をあり処を
あり崩を知るゆゑホなるべきの事ホ撃死るもの稀ニあるとても天の気候不意
ホ一定なるべきさるべ雪頽の下ホ身を粉ホ砕もわり雪頽の形勢いかんとなるべ
なるべきんとする雪の凍たの大なるハ十間以上ホなるも九尺五尺ホわまる大小数百
千悉く方をなす〳〵割りたるごとく〳〵方をなすなるりの幾千丈の山の
上より一度ホ崩頽るその響百千の雷をなす〳〵大木を折大石を倒す此時ハか
なるべき暴風力をたく〳〵粉ホ砕る沙礫のごとく雪を飛せ白日も晴夜の如く

その慄〳〵たる筆舌ホ尽〳〵がたし此雪頽ホ命を捨る〳〵人命を捨〳〵人我ガ
見聞〳〵るを次の巻ホ記して暖国の人の話柄とス

或人問曰雪の形六出なるハ前ホ弁あり詳ス雪頽ハ雪の塊なるゆゑん砕るる
形雪の六出なる本形をとるなるべ〳〵方形ハいかん答て曰地気天ホ寛格〳〵
て雪となるゆゑ天の円と地の方なるとを併合て六出をなス六出ハ円形の
裏ヘ雪天陽を離て降下り地ホ帰バ天陽の円き象うせて地陰の方なる
本形ホ象るゆゑホ雪頽ハ千も万も圭角ヘこのなるべき解るもの角〳〵
円〳〵なるとき陽火の日ホてらさるゆゑ天の円ホよるヘ陰中ホ陽を包ヘ
陽中ホ陰を抱ハ天地定理中の定格ヘ老子経第四十二章ホ曰萬物負
陰而抱陽冲気以為和とハこれ此理を以てする時ハ内義さるいつもか
内義さるでハ陰中ホ陽を抱ずして天理ホ叶ぜをりく〳〵夫ホ代りて理屈
をいハざるべ家内治ざるべそ理屈ホ過牝鳥且をつくるべ

又家内の陰陽前後して天理に違ふ家の亡るもと萬物の天理誣べからざるやうかくのごとしこのゆゑに問客唯ことごとく太りぬ雪頼悉く方形のことわるもあらざるもとも十ゐして七八八方形をうしるはば故に此説を下せり雪頼の図多く方形ふ仏ふものハ其七八をとりて模様を為そのこ

北越雪譜初編巻之上終